

2. 大学ランキングとベンチマーキング

2.1 既存の大学ランキングの分析

本節では、大学間比較を行う方法として大学ランキングの現状を整理する。具体的には、既存の国際大学ランキングとして World University Rankings、Academic Ranking of World Universities、Top 100 Global Universities を取り上げ、その評価手法（評価指標・特徴・重み付け）について整理する。次に、上記の国際大学ランキングも含めた大学ランキング手法が持つ様々な問題点や評価から抜け落ちている観点について議論する。

2.1.1 国際大学ランキングの評価手法・指標

既存の国際大学ランキングの概要を以下に示す¹。

(1) World University Rankings

The Times Higher Education Supplement（英国）が実施しているランキングであり、2004年から開始され、現時点で2006年版まで毎年発表されている。

(a) 評価手法の構成

World University Rankingsでは、以下のような手順で総合スコアを算出・ランキングしている²。

① 指標毎のスコア化

まず、指標毎に各大学の数値をスコア化する。具体的には、その指標について最大値をとる大学のスコアを基準（100点）とし、他大学については最大値との比率に従ってスコア化される。

¹ ここに示した事例以外に、古くから存在する国際大学ランキングとしてゴーマン・レポート（The Gourman Report）が知られているが、同レポートでは具体的な指標・評価手法などが公開されていないため、本調査の対象外とした。

² 「総合スコア」を算出すること問題点などについては後述する。

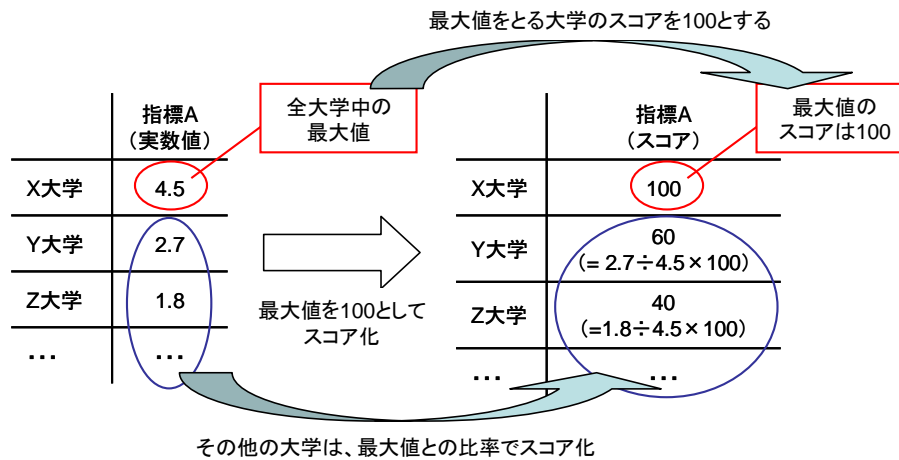


図 2-1 指標毎のスコア化手順

② 指標の合成

スコア化された数値を一定の重み付けに従って足し合わせる。

③ 総合スコアの算出・ランキング

合成された数値を、①と同様の方法で最高点を 100 として正規化し、総合スコアを算出する。総合スコアの高い順にランキングする。

(b) 指標の特徴

① 比較的变化しやすい指標

採用されている指標として「教員一人あたり論文引用数」「学生一人あたり教員数」「外国人スタッフ比率」「留学生比率」は、毎年大きな変動をするものではないものの、数年以上の期間で見れば大学の意思によってある程度変化させることが可能な指標である。

一方、次に示す Academic Ranking of World Universities で採用されている科学賞受賞者数などは、過去の実績に基づく指標であり、短期的にこれを大きく変化させることは困難である。

② 規模要因を排除した指標

採用されている指標は、「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」を除いて「教員・学生一人当たり」や比率といった形で、大学規模要因の排除を試みている。

③ 「評判 (reputation)」に関わる指標

他 2 種類のランキングと比較して、「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」という「評判」に関わる指標を採用している点が特徴的である。

「ピア・レビュー」は、"science" "technology" "biomedicine" "arts & humanities" "social

science" の 5 分野毎に各国の研究者へアンケートを実施し、各分野で研究水準の高い大学を問うものである。一方、「リクルーター・レビュー」は 2005 年ランキング時から採用された指標で、各国の企業関係者に対してアンケートを実施し、今後卒業生を採用したい大学はどこかを問うものである。配点重みは「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」それぞれ 40%、10%と、この 2 指標だけで全体の 50% を占めており、非常に重視されていることが分かる。

(2) Academic Ranking of World Universities

上海交通大学（中国）が実施しているランキングで、2003 年から開始され、現時点で 2006 年版まで毎年発表されている。

(a) 評価手法の構成

Academic Ranking of World Universities における各指標のスコア化、総合スコアの算出・ランキング手順は World University Rankings と同様である。従って、評価手法については World University Rankings と同様の問題点が指摘される。

(b) 指標の特徴

① 短期的に変化しにくい指標

Academic Ranking of World Universities では、「ノーベル賞・フィールズ賞の受賞スタッフ数・受賞卒業生数」といった指標がある。これらは 1900 年台前半にまで遡り、受賞者数を数えたものである。このような指標は過去からの蓄積・実績が強く影響するストック型の指標で、(World University Rankings で用いられている「教員一人あたり論文引用数」「学生一人あたり教員数」「外国人スタッフ比率」「留学生比率」と比較して) 短期的に数値を大きく変化させることが困難である。そのため、ランキングの経年的な変化が World University Rankings と比較して起こり難いと考えられる。

② 大学外部からのデータを中心とした指標

大学内部からではなく、外部リソースからのデータを用いた評価¹を行っている。例えば論文数・論文引用数に関する指標は、トムソン社が所有する文献情報データベースを基に集計されており、科学賞受賞者数に関する指標も科学賞の運営組織が持つデータから集計される。

③ 研究活動を中心とした指標

評価に使用された指標は、研究に関するものが中心となっている。その意味で、Academic Ranking of World Universities は研究活動に関するランキングであっても、

¹ World University Rankings で使用される学生数・教員数といったデータは、最終的には個々の大学が公表・提出する資料から収集される。そのため、一貫した定義でデータを収集することが困難という問題がある。

大学全体を総合的に評価したものとは考え難い。

(3) Top 100 Global Universities

Newsweek 誌（米国）が 2006 年から開始した国際的な大学ランキングである。この評価で最大の特徴は、先行する World University Rankings および Academic Ranking of Universities の評価指標の一部を組み合わせている点である。評価の重みとしては、World University Rankings の指標（の一部）が 40%、Academic Ranking of Universities の指標（の一部）が 50%、独自指標として「図書館蔵書数」が 10%となっている。

表 2-1 既存の国際的大学排名

	World University Rankings	Academic Ranking of World Universities 上海交通大学 (中国) 2003年~(毎年)	Top 100 Global Universities Newsweek (米国) 2006年~ 不明	America's Best Colleges U.S. News (米国) 1983年~(毎年)
	大学院大学は含まない			
受賞		(20%)	(20%)	
			the number of articles published in Nature and Science ネイチャー誌およびサイエンス誌に発表された論文数	
			the number of articles listed in the ISI Social Sciences and Arts & Humanities indices SCIおよびSSCIでの論文引用数	
			the number of highly-cited researchers in various academic fields 被引用度の高い研究者数	
	(20%)		citations per faculty member (using ISI data) 教員一人あたり論文引用数	
受賞		(10%)		
	(20%)		the ratio of faculty to students 学生一人あたり教員数	Faculty resources <100%> (20%)
				Student-faculty ratio 教員一人あたり学生数 <5%> (1%)
				% of classes with fewer than 20 students 学生数20人未満のクラス比率 <30%> (6%)
				% of classes with 50 or more students 学生数50人以上のクラス比率 <10%> (2%)
				Faculty salary 教員給与 <35%> (7%)
				% of professors with the highest degree in their fields 当該分野の最高学位を有する教員比率 <15%> (3%)
				% of faculty who are full time フルタイム教員比率 <5%> (1%)
				Student selectivity <100%> (15%)
				test scores of enrollees on the SAT or ACT tests SAT/ACTスコア <50%> (7.5%)
				% of enrolled freshmen who graduated in the top 10 percent of their high school classes 成績上位新生比率 <40%> (6%)
				acceptance rate, or the ratio of students admitted to applicants 合格率 <10%> (1.5%)
				Retention <100%> (20%)
				six-year graduation rate 6年以内卒業率 <80%> (16%)
				freshman retention rate 新生の翌年在籍率 <20%> (4%)
				Graduation rate performance 予測卒業率達成度 (5%)
財政				(10%)
	International Faculty 外国人スタッフ比率 (5%)		the percentage of international faculty 外国人スタッフ比率	
	International Student 留学生比率 (5%)		the percentage of international students 留学生比率	
	Peer Review ピア・レビュー (40%)			Peer assessment (5.0=highest) ピア評価 (25%)
	Recruiter Review リクルーター・レビュー (10%)	(10%)		
			library holdings (number of volumes) 図書館蔵書数 (10%)	
				Alumni giving rate 卒業生による寄付率 (5%)
	Top 200		Top 100	Top 124

【2006年】	【2004年】	【2006年】	【2003年】	【2006年】	【2007年】(公表は2006年) ※USのみ
1.US (33)	1.US (35)	1.US (54)	1.US (58)	1.US (44)	
2.UK (15)	2.UK (14)	2.UK (11)	2.UK (9)	2.UK (13)	
3.Australia (7)	3.Australia (11)	3.Japan (6)	3.Germany (5)	3.Australia (8)	
3.Netherlands (7)	4.Germany (5)	4.Germany (5)	3.Japan (5)	4.Canada (5)	
5.France (5)	5.France (4)	5.Canada (4)	5.Canada (4)	4.Japan (5)	
5.Switzerland (5)	5.Japan (4)	5.France (4)	5.France (4)	4.Switzerland (5)	
7.Canada (3)	5.Netherlands (4)	5.Sweden (4)	6.Sweden (3)	7.Netherlands (4)	
7.Germany (3)	8.Canada (3)	8.Switzerland (3)	6.Switzerland (3)	8.Germany (3)	
7.Hong Kong (3)	8.Hong Kong (3)	9.Australia (2)	9.Australia (2)	8.Hong Kong (3)	
7.Japan (3)	10.Austria (2)	9.Netherlands (2)	9.France (2)	10.Austria (2)	
11.Belgium (2)	10.Belgium (2)	11.Denmark (1)	11.Austria (1)	10.France (2)	
11.China (2)	10.China (2)	11.Finland (1)	11.Belgium (1)	10.Singapore (2)	
11.India (2)	10.Singapore (2)	11.Israel (1)	11.Denmark (1)	10.Sweden (2)	
11.New Zealand (2)	10.Switzerland (2)	11.Norway (1)	11.Finland (1)	14.Belgium (1)	
11.Singapore (2)	15.Denmark (1)	11.Russia (1)	11.Israel (1)	14.Israel (1)	
16.Austria (1)	15.India (1)		11.Italy (1)		
16.Denmark (1)	15.Ireland				

2.1.2 既存大学ランキング調査の問題点

前節で述べた国際大学ランキングも含め、各種大学ランキング手法に対しては既に様々な問題点が指摘されている。以下では、まず前節で触れた既存の国際大学ランキングで考えられる問題点を指摘した後、大学ランキング手法全般が持つ問題点について整理する。

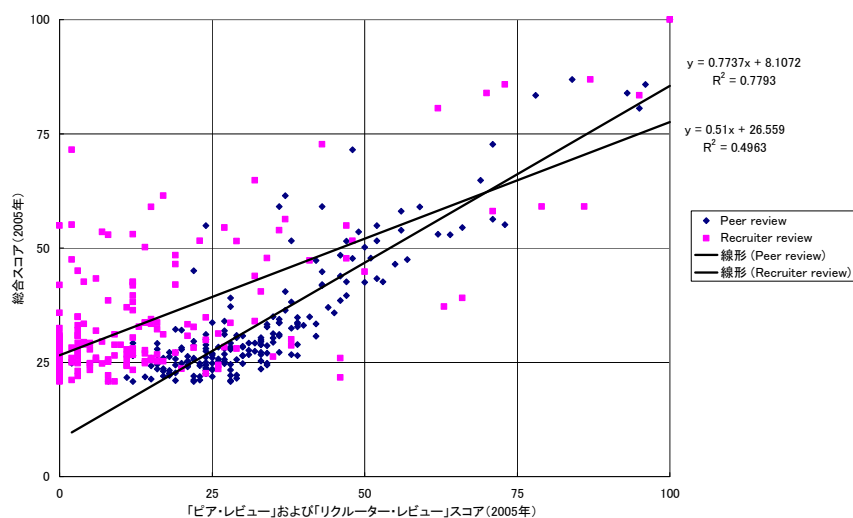
(1) 既存の国際大学ランキングの問題点

(a) World University Rankingsの問題点

① 「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」の信頼性に対する疑問

前述の通り、「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」の重みは合計して50%となっており、非常に重視されている。特に「ピア・レビュー」は全体の40%もの配点を与えられており、当然ながら総合スコアとの相関も非常に強い(図2-2)。また、これらレビューは評価者の主観に基づくものであるため、大学の規模や評判に左右されてしまう。

このような中で結果の信頼性・妥当性をできる限り担保するには、これらレビューを行った評価者の属性(所属、年齢、専門分野など)が非常に重要¹となるが、このような内容については明らかにされていない。



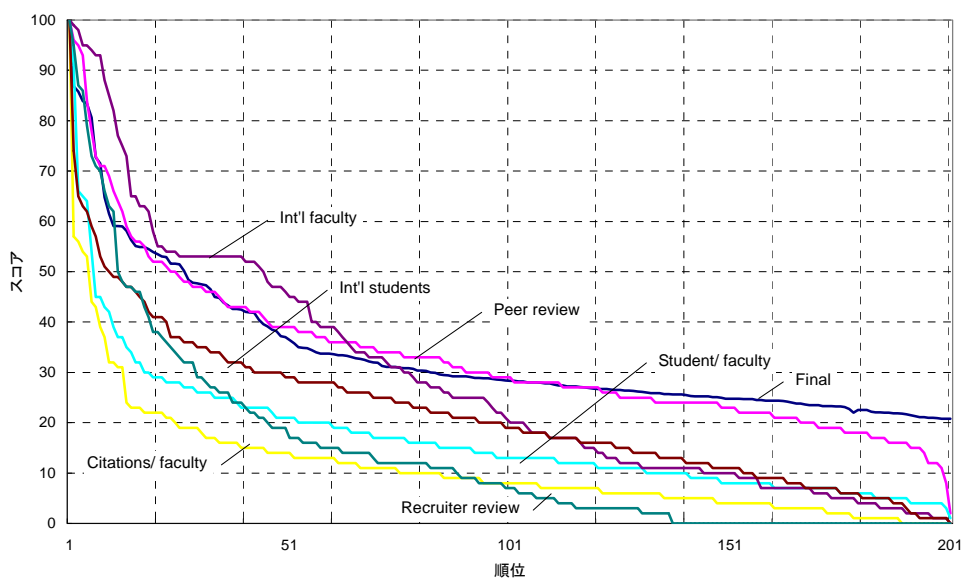
(注) 2005年発表のWorld University Rankings公表結果より独自に作成。

図2-2 「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」スコアと総合スコアの相関

¹ 例えばレビュー参加者が英語圏ばかりで占められていた場合、得られる「評判」も英語圏の大学が圧倒的に優位になる。実際、World University Rankingsにおいてはその傾向が見られる。

② スコア変化に対する順位的不安定性

総合スコアおよび各指標のスコアと順位の関係を見ると（図 2-3）、順位の高いグループでは、大学間のスコア差が小さいことが分かる。つまり、ランキング下位大学では、わずかなスコア変化に対しても順位は不安定であり、多少の順位差にどの程度の意味があるか疑問が残る。



(注) 2005年発表の World University Rankings 公表結果より独自に作成。

図 2-3 各種スコアと順位の関係

③ 収集データの比較可能性

前節で述べた通り、World University Rankings では規模要因の排除を試みているが、規模要因として用いられている教員数・学生数などのデータについては、そのデータの正確性に疑問が残る。

教員数を例とすれば、各国で教員の役職・名称は様々であり、比較可能なデータを収集することは困難であると考えられる。日本国内だけでも講師・助手を含めるのか、非常勤教員の扱いはどうするのか、その他特殊な雇用形態の教員はどうするのかなどの問題が存在しており、定義を明確にした上で正確な数値を収集することは容易でない。

④ 英語圏の優位性

総合スコア上位大学に占める各国の割合を見ると（表 2-2）、米英が圧倒的に優位であり、この傾向は上位大学に限定した場合ほど顕著であることが分かる。言い換えれば、これは英語圏に存在している大学の優位性であり、「ピア・レビュー」「リクルーター・レビュー」における評価者の地域的・文化的分布についても改めて疑問が生じる。

表 2-2 ランキング上位大学の国別比率

地域	国名	総合スコア			
		TOP20	TOP50	TOP100	TOP200
アジア	China	5%	2%	4%	3%
	Hong Kong		4%	3%	2%
	India		2%	2%	1%
	Israel			1%	1%
	Japan	5%	4%	3%	5%
	Malaysia				0%
	Singapore		4%	2%	1%
	South Korea			1%	1%
	Taiwan				0%
	Thailand				0%
アジア 集計		10%	16%	16%	17%
ヨーロッパ	Austria			2%	1%
	Belgium			3%	1%
	Denmark			1%	1%
	Finland			1%	1%
	France	5%	4%	5%	4%
	Germany		2%	2%	4%
	Ireland				0%
	Italy				1%
	Netherlands			4%	5%
	Norway				0%
	Russia			1%	1%
	Spain				0%
	Sweden				2%
	Switzerland		4%	4%	3%
United Kingdom	20%	16%	13%	12%	
ヨーロッパ 集計		25%	26%	36%	41%
中南米	Brazil				0%
	Mexico			1%	0%
中南米 集計				1%	1%
北米	Canada		6%	3%	4%
	United States	60%	40%	31%	27%
北米 集計		60%	46%	34%	31%
オセアニア	Australia	5%	12%	12%	8%
	New Zealand			1%	1%
オセアニア 集計		5%	12%	13%	10%

(注) 2005年発表のWorld University Rankings公表結果より独自に作成。

(b) Academic Ranking of World Universitiesの問題点

① 人文・社会科学系大学の順位傾向

Academic Ranking of World Universities では、人文・社会科学系に特化した大学はランキングの下位に位置する傾向がある。この理由として、英語で書かれた人文・社会科学系論文が、英語で書かれた自然科学系論文よりも少ないことが挙げられる。このため、2004年以降は、人文・社会科学系大学において「ネイチャー誌およびサイエンス誌に発表された論文数」は指標から除外されており、その分の重みは他指標に再配分されている。

② 「教員一人当たりの成果」の扱い

表 2-1にある「教員一人当たりの成果」とは、これ以外の指標に関する総合スコアを各大学の教員数で除算したものを指している。しかし、国際的に比較可能なデータとして教員数を収集することは困難であり、実際にアメリカ・中国・オーストラリア・イタリア・オランダ・スウェーデン・ベルギー以外の国では教員数を入手できていない。教員数を入手できなかった大学では、「教員一人当たりの成果」としてその他5指標の加算スコアを用いているが、この点はAcademic Ranking of World Universitiesの大きな問題点であると考えられる。

③ 英語圏の優位性

World University Rankings と同様に英語圏大学の優位性が指摘されている。Academic Ranking of World Universities では、論文数、論文引用数などのデータソースとしてトムソン社 (The Thomson Corporation) の学術文献情報データベースを利用しているが、このデータベースの収録内容は英語文献中心であることが知られている。従って、英語圏以外の大学では、自国の言語などで発表された論文については評価対象となっていないものが多く存在することになり、ランキング上不利となる。

④ 総合的な大学ランキングとしてみた場合の指標の偏り

2.1.1でも指摘した通り、Academic Ranking of World Universitiesでは研究活動関連の指標を中心とした評価であり、教育その他の活動についてはほとんど考慮されていない。従って、同ランキングは学術的な視点からの大学ランキングであるとは解釈できるが、大学全体を捉えた総合ランキングであるとは考え難い。

⑤ 科学賞受賞者数に関する指標の評価方法

Academic Ranking of World Universitiesでは、ノーベル賞・フィールズ賞を受賞したスタッフ数・卒業生数に関する指標を採用している。これらは表 2-3のような重み付けで数えられた数値を用いている。これから明らかなように、歴史の浅い大学ほど受賞者をカウントできる時期が短くなり、ランキング上不利に働く。

また、一般に研究成果の発表と科学賞の受賞にはある程度の時間差が伴うものであり、研究成果発表時点での所属組織と受賞時点での所属組織とが異なる場合などが存在する。つまり受賞者数が当該研究機関の教育・研究水準を正しく反映していない可能性があり、指標の妥当性に疑問が残る。

表 2-3 科学賞受賞者数に関する指標の算出方法

指標	重み付けの基準
ノーベル賞もしくはフィールズ賞を受賞したスタッフ数	受賞時期により重み付け。 2001年以降 → 100% 1991～2000年 → 90% … 1911～1920年 → 10%
ノーベル賞もしくはフィールズ賞を受賞した卒業生数	学位取得時期により重み付け 1991～2000年 → 100% 1981～1990年 → 90% … 1901～1910年 → 10%

(2) 大学ランキング手法全般の問題点

以下ではランキング形式の大学評価手法における一般的な問題点について整理する¹。

(a) 数値化不可能な情報の欠落

ランキング手法は、多数の評価指標を考慮しているとしても、最終的には一元的な尺度に基づいて順位付けを行う作業であり、その際には評価指標を何らかの形で数値化することが必要となる。逆に言えば、数値化不可能な情報は一元的な尺度の上に乗せることができないため、ランキング手法では無視せざるを得ない。

一方、大学活動の主要な部分を占める教育・研究に関する情報を正しく数値化することが可能か否かについては疑問が残る。例えば、大学の研究水準を測る定量的指標として論文発表数や被引用回数などが用いられるが、論文の真の学術的価値は長期的な視点に立たねば判断できないものであり、これらの指標が研究の「質」を正しく反映しているとは断定できない。加えて、教育活動は研究活動よりも定性的な要素が多く、数値化はさらに困難であると言われている。

このように、大学活動に関連した指標の大部分が数値化不可能と考えたとき、(大学活動のごく一部のみしか表現できない)数値化可能な情報だけで作成される大学ランキングの妥当性が問われることになる。

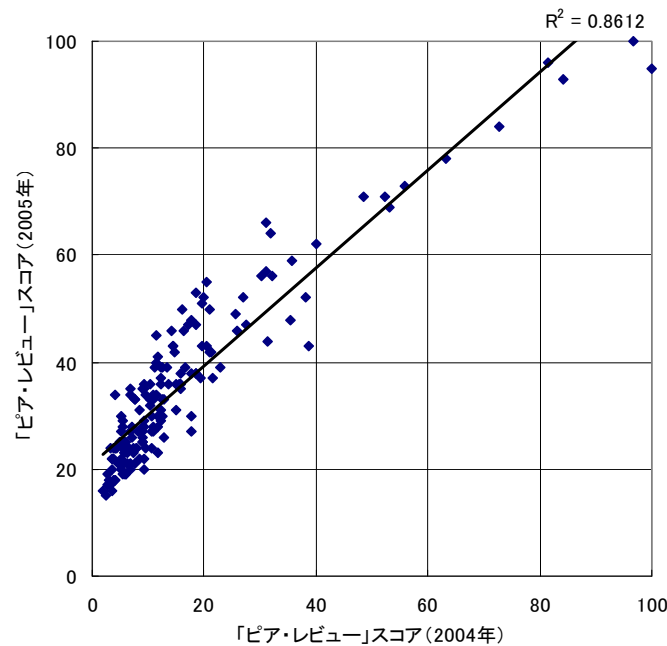
(b) 「評判」の妥当性

前項で指摘した数値化不可能な情報を扱う一つの解決策として「評判」を扱うことが考えられる。つまり、数値化不可能な情報の処理を評価者の「判断」に任せ、代わりに複数の評価者から得られる「判断」を集約することで「評判」を数値化するという手法である。

このような「評判」による評価の問題点は多くの研究で指摘されている。その最も重要な点は、「評判」は容易に変化せず過去のランキング結果に強く影響されるという事実である。例えば、World University Rankingsにおける「ピア・レビュー」スコアを2004年と2005年の結果で比べてみると(図 2-4)、特に上位大学についてはほとんど変化のないことが分かる。

全ての大学について十分な知識を持ち合わせているわけではない評価者にとって、それを補うには過去からの「評判」を参照することが最も簡単な方法であろう。この結果として、過去からの「評判」が現在の「評判」を形成し、ランキングにも影響するものと考えられる。

¹ 本小節は、「世界大学ランキングの比較」(『私学高等教育研究叢書』2005年)の内容を中心にまとめたものである。



(注) 2004～2005年発表の World University Rankings 公表結果より独自に作成。

図 2-4 World University Rankings における 2004 年・2005 年「ピア・レビュー」スコアの相関

(c) スコア（比例尺度）と順位（順序尺度）の乖離

一般に、ランキング下位大学のグループは互いのスコアが接近しており、わずかなスコアの差が大きな順位の変化を生む場合がある。これは、スコアが比例尺度であるのに対して順位は順序尺度であることに起因しており、(1) (a) で具体的に述べた通りである。このように、ランキングという手法を採用することによって、統計的に有意とは言えないようなわずかなスコアの差が、大きな順位の違いとして強調されてしまう危険性がある。

(d) 重み付けの恣意性

一般的な大学ランキングは、複数の指標から一定の重み付けに従って総合スコアを算出し、それに基づいて総合ランキングを作成する。表 2-1 で示した国際大学ランキングを始めとして、国内外で行われている様々な大学ランキングにおいても同様の手法が採られている。

ここで問題となるのは、設定した指標の重みについて、その妥当性の説明が困難なことである。指標の重み付けは、ランキング結果に大きな影響を与えることが指摘されているものの¹、ほとんどの大学ランキングにおいて「何故その重み付けにしたのか」という根拠は明らかにされていない。

¹ この点に関しては「市場型大学評価」（『高等教育研究』第 5 集 2002 年）および「個別大学情報の内容・形態に関する国際比較 第 6 章」（『大総センターものぐらふ 2』 2003 年）を参照されたい。

(e) 国際大学ランキングにおける問題点

一国の範囲内で行われる大学ランキングと比較して、国際大学ランキングには更なる問題点が存在する。ここでは、以下の2点を指摘する。

① 国際的に比較可能なデータ収集の困難

複数の国にまたがる大学ランキングを実施する際に最も困難なのは、共通的な定義の下で入手可能なデータが非常に限られる点である。従って、国際大学ランキングで用いる指標は限定された範囲のものになりやすい。表 2-1で参考として掲載した米国大学ランキング“America’s Best Colleges”が採用している指標の内容と、国際大学ランキングが採用している指標の内容を比較すれば、その詳細さに大きな違いが見られる。このことから国際大学ランキングにおいてデータを収集することの困難さが分かる。

② 英語圏大学の優位性

表 2-1からも分かるように、国際大学ランキングにおいては共通的に入手可能なデータとして、「評判」に関する情報や論文発表数・被引用回数などが用いられている。前者については各国研究者のアンケートなどである程度収集可能であるし、後者の情報源としてはトムソン社の所有する商用データベースなどが挙げられる。

ここで問題となるのが英語圏に存在する大学の優位性である。「評判」においては、評価者が英語圏内に偏ることで英語圏大学が優位になり得るし、論文などの商用データベースはそもそも英語文献情報中心であることが一般的である。このように国際大学ランキングにおいては、データの収集段階で英語圏の大学が優位となるような作用が働くことを理解しておく必要がある。

(f) 「市場型評価」における問題点

以上までの事柄以外に、「市場型評価¹」でしばしば指摘される問題として、評価手法（評価指標やその重み付けなど）を頻繁に変更することによって評価の一貫性が失われてしまうという点がある。市場型評価は必ずしもランキング形式とは限らないが、市場型評価の持つ商業的動機によりランキング形式が採用されることが多く²、評価手法を頻繁に変更する理由も商業的な動機が背景にあるものと考えられる。その理由について以下に示す。

① 評価結果に対する信頼性・正当性の獲得

頻繁に評価手法が変更される理由として、評価結果の精度向上が考えられる。また、市場型評価の多くは、結果だけでなく評価手法についても一定程度公開した上で、手法の「改善」を行っている。これは、目に見える形で評価手法の「改善」を行うことで、評価結果に対するさらなる信頼性・正当性の獲得を目指したものであると考えられる。

② 結果における新規性の確保

評価手法の「改善」は必然的に評価結果（ランキング）の変化をもたらす。1年程度の期間では各大学の状況にあまり大きな変化が起こりえないため、毎年全く同じ手法で評価を実施した場合、評価結果ランキングの変動はほとんど起こらないと考えられる。市場型評価では、結果は受け手の興味を惹くものである方が望ましく、その意味で評価手法の「改善」は適度にランキングの変化をもたらし、受けての興味を惹く要因となり得る。

¹ ここでは、民間企業（特にマスメディア）などにより提供される大学情報の中で、一定の評価を含むものを「市場型評価」と定義する。詳しくは金子「大学評価のポリティカル・エコノミー」（『高等教育研究』第3集 2000年）を参照のこと。

² 市場型評価は、基本的に評価結果を何らかの形で販売する（雑誌に掲載するなど）ことを目的としており、「分かり易さ」「インパクト」という観点から、評価結果はランキング形式で発表されることが多い。

2.2 大学ベンチマーキングのあり方と大学ランキングとの関係性の検討

前節において、大学間比較を行う方法として大学ランキングを取り上げ、その現状と問題点を整理した。そこでも述べた通り、大学ランキングには様々な問題点が存在し、評価結果の妥当性・正確性に対して疑問が残る。また、全ての情報が大学間の序列に集約されてしまうことで、評価結果に対する解釈がかえって難しくなるという一面も持つ。以上のことから、評価結果から大学の強み・弱みを明らかにし、大学活動の改善行動に資するという点で、大学ランキングは一定の限界があると言わざるを得ない。

本節では、大学間の比較を行うもう一つの手法として、ベンチマーキングを取り上げ、そのあり方および大学ランキングとの関係性を整理する。

2.2.1 大学ベンチマーキングと大学ランキングの関係性

大学ベンチマーキングと大学ランキングの特徴を表 2-4に示す。

表 2-4 大学ベンチマーキングと大学ランキングの特徴

手法	目的	指標	対象大学数
ランキング	大学の順序付け （「A, B, C ランク」「1 位、 2 位...」など）	定量的指標、もしくは定性的 指標の数量化が必要	多数 （数 10 校～）
ベンチマー キング	大学間の詳細比較による強 み・弱み分析（必ずしも順 序付けは必要ない）	定量・定性的指標のいずれも 活用が可能	少数 （数校程度）

(1) 目的

大学ランキングの目的は、様々な指標を用いながら、最終的には一定の尺度によって大学を順序付けることである。このような結果の形式的な「分かり易さ」から、ランキングは市場型評価においてしばしば用いられる一方で、ランキングの根拠となる尺度の意味や妥当性については様々な問題点があることは前節で指摘したとおりである。

一方、大学ベンチマーキングの目的は、大学間の詳細な比較分析を行うことで、大学の特徴（強み・弱み）を抽出することである。従って、対象大学全体にわたって何らかの順序付けを行う必要はない。

(2) 指標

大学ランキングにおいては、順序付けするという目的のため、数量データを分析する必要がある。従って、扱うことができるのは定量的指標もしくは何らかの形で数値化可能な定性的指標のみであり、数値化不可能な指標を分析することができない。

大学ベンチマーキングでは、順序付けを目的としない以上、定量的・定性的いずれの指標でも扱うことができる。大学活動には数値化困難な部分が多く存在することを考慮すると、強み・弱みを抽出するには数値化不可能な情報をむしろ積極的に活用・分析す

る必要があるといえよう。

(3) 対象大学数

大学ランキングは、比較的多数の大学を対象として分析することが多い。この理由として、ランキングという結果にインパクトを持たせるには一定規模以上の分析が不可欠である点、精度を要求しない限りデータの収集・数量化は比較的 low コストで実施できる点などが挙げられる。大学ランキングとは、比較的 low コストで多数の大学を一度に比較できる手法であるといえることができる。

大学ベンチマーキングでは、大学間の詳細な比較が中心となるため、あまり多数の大学を対象とすることがコスト面から困難である場合が多い。既存事例においても数大学間で分析が行われているものが多い。

2.2.2 大学ベンチマーキングあり方

前節の内容を踏まえて、大学ベンチマーキングを実施する上でのポイントを示す。

(1) 目的の明確化

大学ベンチマーキングでは詳細な比較を行うため、分析にかかるコストが大きくなる。そのため、時間的・予算的制約の中で有益な結論を導くには、分析目的（何を明らかにしたいのか）を明確にした上で、その目的を達成するのに最低限必要な指標・データを特定する必要がある。

(2) 適切な比較対象の選定

前節で述べたように、大学ベンチマーキングは多数の大学を分析対象とするのではなく、目的に合致した絞り込んで比較する。従って、目的達成に適した比較対象大学を選定することが、分析の成否にとって非常に重要となる。

(3) 高精度で詳細なデータの収集

特に教育活動など数値化困難な事柄における分析においては、外形的・定量的データだけでなく定性的で詳細なデータが必要となる。また、比較対象大学が少数であるため、情報の精度・正確性に問題がある場合、大きく誤った結論を導いてしまう危険性が高い。

以上のように、大学ベンチマーキングでは高精度で詳細な情報の収集が非常に重要であるが、そのような情報は公開情報などからは得られないことも多い。その意味で大学ベンチマーキングの実施主体は、比較対象大学との直接的な接触を図り、情報提供などの協力を得る努力が望まれる。